

先日せんじつの2月3日にがつみつ か、議政府ウイジャンプキョウク教区しさいで司祭じよさい・助祭叙階式じよさいじよかいしきが行われおこな、新しい司祭7人と助祭5人が誕生あたしました。本来ほんらいは大きな式場おおで行われるはずでしたが、今年しきじョウは新型コロナウイルス感染症おこなのため、司教座しきョウザで行われおこなました。参加者さんかしゃの人数にんずうも制限せいげんされ、対象者たいしョウシャの父母ふや出身しゅっしん教会キョウカイの司祭しさい、また、推薦すいせんした司祭しさいしか与ありなかつたので、ちょっと寂しいさみ気がきしました。でも、この全人類ぜんじんるい的な苦しみくるみの中で行なわれた司教座しきョウザでの叙階式じよかいしきでしたから、新司祭しんしさいや新助祭しんじよさいの心こころは特別とくべつだったと思おもいます。どうか、これからの彼らかれの人生じんせいの道みちが神様かみさまの御心みこころにかな適みちう道みちとなるように、また、その道みちを忠実ちゅうじつに歩あゆむことができるようにと祈いのるばかりです。

考かんがえてみたら、司祭しさいの道みちは一本いっぽんのロープうえの上わたを渡きるようなものではない気がわたくしします。私わたし自身じしんも「これからはもっと誠実せいじつに生きて行いこう。」と思おもいながらも、色々いろいろな誘惑ゆうわくに陥おちったり、様々さまざまな過あやまちや罪つみを犯おかしたりしています。幸さいわいに来日らいにちしてから、「これからは新たあらになろう。」と決けっしん心どりよくし努力いぜんしていますが、それでも依然かとして変じぶんわっていない自分みを見つぼあいける場合おが多いです。日に本ほんでの宣せんきョウ教活動かつどうのきっかけは神学生しんがくせいのとき読よんだ「沈黙ちんもく」という小説しョウセツでしたが、司祭しさいの少すくない日に本ほんの教きョウ会かいや信者しんじヤさんたちに、足りたないけれども自分じぶんが何か役立やくだつものとなりたおもいという思おもいで、わたしは来日らいにちしました。勿論もちろん、その為ためには韓国かんこくでの安楽あんらくな生活せいカツを諦あきらめねばなりませんが、むしろ、その放棄ほうきによって、わたしは新たあらになれるという思おもいもありました。なのに、まだまだ、昔むかしの自分じぶんに留とまろうとしているのは、何なんと愚おろかでしょう。

先週せんしゅうの主日しゅじつの福音ふくいんで、会堂かいどうで汚よごれた霊れいに取りつかれた人ひとを解放かいほうしてくださったイエス様さまは、今日きよの福音ふくいんでは、シモンとアンデレいの家いえを訪たずねられました。その時とき、シモンのしゅうとめひどは酷ひどい熱病ねつびョウで苦しくるんでいたため、イエス様さまはまず彼女かのじョの手てを取とってその病びョウ気を治なおしてくださいました。そのイエス様さまの訪問ほうもんには4人よにんの弟子でしたちも同行どうこうしましたが、きっと他たの人ひとたちもそこそこにいたはずで、彼らかれはイエス様さまがペトロしゅとめのいやみを癒ゆうされたのを見て、夕方ゆうがたに自分じぶんたちの周まわりのあらゆる病人びョウにん

や悪霊に取りつかれた人々を、ペトロの家のイエス様のもとに連れてきたわけです。イエス様はその病人たちをも治され、また、悪霊どもを追い出されましたが、悪霊はイエス様を知っていたので、物を言うことをお許しになりませんでした。そして翌日の朝早く起きて、人里離れた所で祈っておられたイエス様は、ご自分を捜し回っていた弟子たちを連れてガリラヤ中の他の会堂を訪れ、そこでも宣教されました。その時、弟子たちはイエス様に、人々が探していると話しましたが、イエス様は他の町や村での「宣教のために出て来た。」とはっきりおっしゃいました。こうして、イエス様と弟子たちとの本格的な宣教の旅路は始まったのです。

わたしは福音の全体的な風景を頭の中で描きながら、いくつかの場面を黙想してみました。先ずはペトロとアンデレの家のことです。この兄弟は自分たちの船や網を全部捨て、イエス様に従い、突然失業者になったでしょう。しかも、アンデレはすでに結婚していた兄の家に住んでいて、そこにはペトロの姑も住んでいたわけです。何と貧しくて悲惨な風景でしょう。恐らく、この兄弟のことは近所の人々の話題となったに違いありません。その暗くて沈鬱な家で、シモンの姑は熱病まで患っていました。しかし、イエス様が来られてから、雰囲気は一気に反転したはずです。ペトロの姑のことを耳にした多くの人々がその家を訪ね、イエス様によって皆元気になったり、悪霊から自由になったりして、貧しさと病の闇と沈黙に包まれていたペトロの家は、喜びのにぎやかな声と笑い声で溢れるようになったでしょう。

その波乱に満ちた一夜が去って、新しい希望の中で一日が始まりましたが、イエス様の姿は見あたりませんでした。きっと人々はみな慌てて、イエス様の行方を調べたに違いありません。そして、ようやく弟子たちはイエス様を見つけましたが、その時イエス様から聞いた話は彼らにとって、まるで、寝耳に水のようなことだったと思います。なぜなら、当時は誰かの弟子になったら、その先生の所に通いながら色んな教えを学ぶことが普通でしたが、イエス様には定住の場所がな

かったからです。言い換えれば、イエス様が教える現場とは、イエス様ご自身がいらっしゃる所で、それは神様の積極的な働きかけを現し、また、人間の苦しみを共に負われる神様の姿を表すことでもあります。確かに、イエス様の学校は人間の涙がある所、苦しみと悲しみがある所であって、そこでイエス様は御言葉と御業を通して、彼らと共におられる神様を示してくださいました。そのようなイエス様の姿から、弟子たちは少しずつ、神様が憐れまれるすべての人に仕える人となる道を学び、人を取る漁師として一人前となったはずです。

きょうの第1朗読で、自分の全財産と子供たちを失ったヨブは、ため息が混ざったような言葉で神様に祈りました。一見、彼の祈りは人間の虚しさを語り、それと共に神様への恨みを訴えるようですが、実は、ヨブは最後まで神様に背きませんでした。むしろ、自分には神様だけがおられることを、神様に強く申し上げたのです。神様はヨブを通してご自分が人間の苦しみと悲しみを共にしておられる方であることと、その苦痛のさなかでも人がご自分を仰ぎ見、また、ご自分により頼むことを望んでおられるのを教えられたわけです。イエス様が神様のその姿を示されたのは言うまでもないことでしょう。イエス様は世の中で最も弱い人たち、また、神様の他は希望がないことを認める人たちを訪れ、彼らに慰めと勇気、また、癒しと命を与えてくださいました。そして、そのイエス様の働きは弟子たちにも受け継がれ、彼らも同じく、すべての人の救いのために働いたわけです。それは今日の第2朗読の使徒パウロの手紙からもよく分かります。パウロは世の中のことににおいては豊かに恵まれた人でしたが、イエス様と出会い、また、その愛の福音を学んでからは、その全てを捨てました。そして、その福音を告げ知らせる人となって、ひたすら人々の救いのために祈ったり、働いたりしたのです。彼は自分にそういう任務が任せられたこと自体が神様からの報酬だと告白し、感謝と喜びの中でその務めを全うしたのです。

神様に自分を任せ、イエス様に従うのは司祭だけでなく、信仰のあるすべての人の大事な務め

であり、人を愛すること、特に、もっとも弱い人の友となるのも軽んじてはいけない務めなのです。
人種や国籍、偏見と差別を超えて、すべての人のために祈りつつ、働くのは私たちが信仰のある人
たちの当然な務めだと思えます。それを心に留めながら、神様が私たちをその道に導いてくだ
さるよう、お祈りいたします。